

第 4 回有識者会議

東京大学 大学院学際情報学府 博士課程

森吉 蓉子

もりよし ようこ 森吉 蓉子

- 東京大学大学院 渡邊英徳研究室
博士課程 2 年
- 主な関心：
デジタルアーカイブの制作と活用
を通した
非体験者による戦災記憶の
継承活動の支援



研究室について

○ 渡邊英徳研究室

- ・ デジタルアーカイブ
- ・ 情報デザイン
- ・ データビジュアライゼーション
などの研究

2025年 広島、長崎、大阪、新潟、神奈川など
全国で展示・活動。

8月11日から17日には、長崎原爆資料館で、
長崎国際テレビと「ミライの平和活動展」を主催。
会期中は約3000人の来場。



博士研究

○ 目的

- ① 広島・長崎で育成されている、戦後生まれの被爆体験の語り手に関して、デジタルアーカイブを制作すること
- ② ①で制作したデジタルアーカイブを、語り手による講話活動の場や、語り手候補者に使用してもらい、次世代以降への語り手の存続支援の一助となるか、検証すること

○ 期待される効果

- ① 語り手の背景・思い等をとおした、次世代への直接的な継承
- ② 先人（今日の語り手）の活動記録としての利活用と、語り手の存続

○語り手の育成

① 広島市「被爆体験伝承者等養成事業」

養成研修スケジュール

研修期間は、被爆体験証言者は概ね1年間、被爆体験伝承者及び家族伝承者は概ね2年間です(講話原稿の作成時期によっては、それより早く修了することも可能です。)

被爆体験証言者

被爆の実相や話法技術等の講義を受講後、講話原稿を作成した後、講話実習を行います。

被爆体験伝承者

被爆の実相や話法技術等の講義を受講後、証言者から被爆体験の伝授を受け、講話原稿を作成した後、講話実習を行います。

家族伝承者

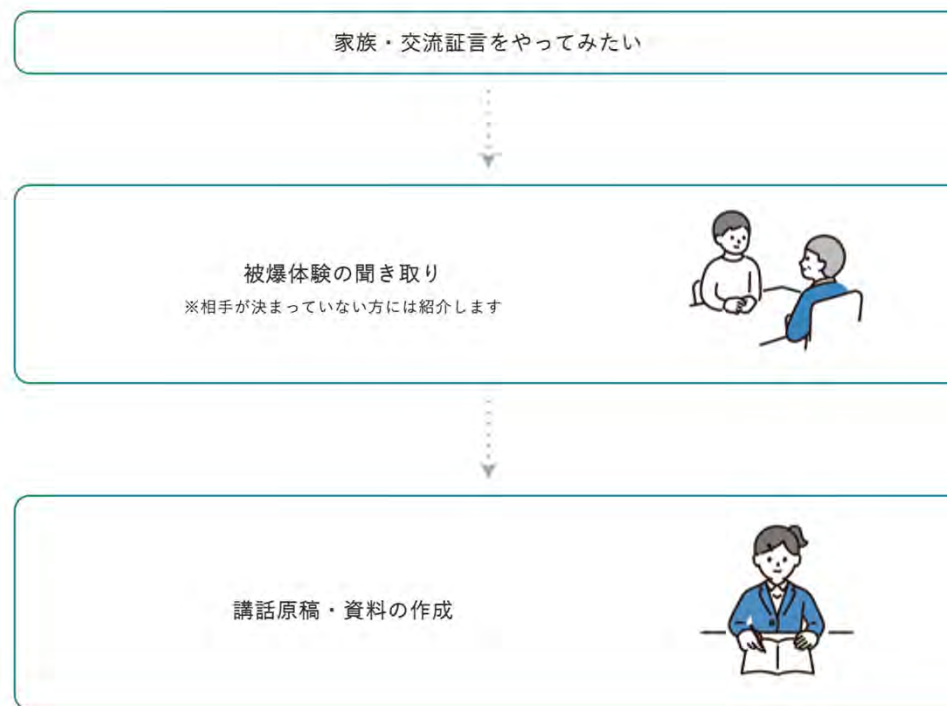
被爆の実相や話法技術等の講義を受講後、家族である被爆者から被爆体験の伝授を受け、講話原稿を作成した後、講話実習を行います。

② 長崎市「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業」

家族・交流証言者の育成

原爆投下・終戦から70年以上が経過し、被爆者の高齢化が進んでいます。被爆者から、直接お話を聞くことが難しくなりつつある今、被爆者との交流を深め、被爆体験や思いを聞き取り、証言者として活動してみませんか？活動開始に向けて、講話原稿作成の支援や各種研修の開催など、様々な形で支援します。まずはお気軽に、事務局までお問合せ下さい。

※長崎市からの受託事業



長崎平和推進協会のサイトより：
<https://www.peace-wing-n.or.jp/inheriting/training-storytellers/>

○ 被爆体験伝承者育成事業への参加



中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターより：
<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=92111>

- 被爆者・新井俊一郎さんの体験を語り継ぐ
- 第12期生として参加中
- 課題：
 - ・ 伝承者同士での交流が少ない点
（※ここ半年、家族伝承者が団体を立ち上げ、
機会を設ける様子も）
 - ・ 体験記にはない細かい話、語り継ぎにおける工夫、
活動時の葛藤や思いなど、
被爆体験そのものを取りまく情報を引き継ぐ方法が
定まっていない点

- ① 語り手の背景・思い等をとおした、
次世代への直接的な継承
- ② 先人（今日の語り手）の
活動記録としての利活用と、語り手の存続
- ③ 養成事業への参加によって見えてきた
課題の改善

⇒ これらの役を担うデジタルアーカイブを制作

制作したデジタルコンテンツ

○ デジタルアーカイブ

- 「広島・長崎 語り手のアーカイブ」
- 平和学習用教材「ブラジル移民と被爆者慰霊碑」
「被爆樹木」
- 「消滅危機言語デジタルアーカイブ」
- 「絵と詩 ショルのところ」
(少数民族によるアート作品)



○ 白黒写真のカラー化

・ 歯舞群島 多楽島出身：福澤さんの所有写真



デジタルコンテンツでの「継承」

○ どういう効果があるのか

① 昔の歴史的出来事が、今の技術で蘇る

→「昔起きたこと」が「明日起きるかもしれないこと」に感じられる（＝啓発）

② 記録・制作の過程を蓄積することが可能

→アーカイブとして完成するまでの経緯・順序を、のちの世代が踏襲できる
（＝文献資料とは異なるたくわえ）

デジタルコンテンツでの「継承」

○ 効果を得るために重要なこと

- “人”に使われるものであること

たとえば、

- ・ 語り手が講話の場でデジタルコンテンツを見せながら、被爆体験を解説する
- ・ 先生が生徒たちにデジタルコンテンツを使わせて、歴史を学ばせる
など

⇒ “人から人へ”の構造は変わらない。

その中で、どう使うか、見せるかを工夫する必要がある。

実践例



質疑応答の様子。講話時このような形態で、スクリーンにPowerPointを映しながら行われた。

○ 8月7日 日本生協連主催 「ピースアクションinナガサキ」

- ・ 「広島・長崎 語り手のアーカイブ」を公開。
- ・ 交流証言者・荒木千尋さんを招聘。
- ・ デジタルアーカイブの説明
 - 講話
 - アーカイブの閲覧
 - 質問タイム（渡邊教授との鼎談）



アーカイブを閲覧している様子。タブレットは1グループに1台、アーカイブのWebページを全て印刷した紙資料（語り手1人あたりおよそ40枚になる）を1人1部配布した。

○ 8月16日ミライの平和活動展

「戦後生まれの語り手×デジタルアーカイブでつなぐ『継承』」

@長崎原爆資料館

→

交流証言者・鈴田健二さんを招聘。

この日の講話のために、
自身の背景を含めた原稿を作成。
被爆者の両親について、
公の場で話すのは初めて。





アーカイブを閲覧する時間。講話者と司会（森吉）が、各テーブルを訪問。
どのグループもタブレットと手元の資料、両方を活用していた。



←

親子の参加者。

お子さんは「タブレットの方がいい」と、積極的に閲覧。
漢字があつたり内容が難しかったりしても、“デジタルである”というだけで、子供世代には刺激になった。

親御さんは、手元の資料を閲覧。

今後について

○ 「広島・長崎 語り手のアーカイブ」利活用に関する調査

- 語り手がアーカイブを講話時に使用した場合の活用方法と効果
- 語り手の候補者（研修生）がアーカイブを研修時（原稿作成時など）に使用した場合の活用方法と効果
- 継続的な調査として：
中学校以上の平和学習における事前学習・事後学習での活用方法と効果

⇒ 「どういう“人”がどのように使うのか？使ってどのような効果があったのか？」
調査する。